

## 編集後記

近年、学術雑誌の評価は国際的な基準により判定され、点数の変化により、その所属学会では一喜一憂している。したがって、編集企画を担当する委員会では、いかにして一流誌にするか、そのために内容と質の向上を目指し、しかも維持するかが問題とされている。そのため内容の独創性の点で、敷居が高くなったり、質の面で執筆者との間を何度も往復し、採用には長い月日がかかることもある。しかも一度出版されたものへのチェックも厳しく Letters to the Editor という形で誌上討論されることもある。我が国でもすでに徐々にではあるが、これと同様の体裁がとられている。本誌もちょうど30巻を迎え、昨年29巻11号で大原毅委員長から編集方針、方法などについての考えの詳細が紹介され、日本語の最高の雑誌を目指している旨も会員に御理解いただけたものと思われます。30巻1号からは、表紙のデザインも一新し、これを機会に鈴木博孝担当理事からは、その変更経過と表現する意味から21世紀に向けての学会の進むべき道と本誌の編集の意気込みを紹介させていただきました。

さて、平成8年度での投稿原稿数は原著132編、症例報告ほかを含む総計313編であり、7年度に比べそれぞれ5.6%、2.0%増であった。一方、不採用論文は原著35編(26.5%)、症例報告ほかを含む総計96編(30.7%)であり、7年度の24.0%、30.0%に比べ、わずかではあるが増加し、採用されにくくなっているものと思われる。しかし、投稿された論文も質のよいものになるように書き直してもらうのも編集過程の大きな業務です。ところが残念なことに修正、書き直しを通知後、再投稿のない論文もあります。誠意ある回答の得られた論文には、出来るだけ採用の方向で対応しており、また見違えるほど、質が上がった論文を拝見することに無上の喜びを感じるのは、小生だけであろうか。最後に査読は、それを担当する編集委員と執筆者との信頼関係の上に成り立っていること、またその限界もあることも御理解いただきたい。

(杉山 貢)